

# ドラブルの女性たち

## —— 60年代の知的女性の姿 ——

大 野 佳代子  
(英文学科)

### 序

1965年に発表された *The Millstone* で、〈未婚の母〉となる若い女性の精神の軌跡を描き一躍有名になった Margaret Drabble の作品では、Michael Ratcliffe をして、‘Men are not needed, except for making babies; they are not even treacherous, but simply absurd.’<sup>1)</sup> と言わしめたほど、男性の心理描写は極めて少なく、男性優位の既存社会に生きる女性の姿が、さまざまな視点から描かれている。‘women’s novelist’ と称される所以であるが、殊に初期の三作品は、一人称による語りという形式の点からも、内容的にも、相互に関連性の強いものである。本論では、これらの相関性をみると共に、Drabble が特に知的エリート女性を多く題材に扱っている点に注目して、これらの作品に於ける〈知的エリート性〉の存在意味について考察してみたい。

### I

イギリスでは60年代後半から70年代の初めにかけて、「許される社会」(permissive society) という言葉が流行し、夫婦それぞれの「婚外ロマンス」なども社会意識の上では「許される」ようになってきた<sup>2)</sup> ということである。このような男女関係の自由化は上流階級に端を発し、第二次大戦後60年代になって漸く労働者階級にも及んできた<sup>3)</sup> のだと言われる。過去連綿として続いてきた、「英国人にとって家庭は城」と言われる程の、家庭を基盤とした確固たる社会体制は、崩壊しつつあるのだろうか。60年代には離婚法改定についても未だ賛否の論議が激しかったのに、その後十年足らずの間に、思いきった離婚手続簡易化が法的にも実施される

に至った<sup>4)</sup> という。60年代に入ってからピルの普及と共に、男性に依存する従来の生活態度への反省と自由・自立への志向とが芽生え、この時期、女性の意識は大きく変わりつつあった。

Drabble が処女作 *A Summer Bird-Cage* を発表したのは1963年であるが、彼女が初期の作品で描いているのは、まさにこの変わりつつある60年代社会に生きる女性の、必死に自己確立を目指す姿である。‘the English novel has traditionally contributed to social reform through its criticism of social inequities’<sup>5)</sup> と、V. K. Beards が言うように、Drabble は新しい世代の女性の生き方のさまざまな可能性を提案しているのである。

*The Millstone* の主人公 Rosamund は妊娠したことに気付いた時、ジンを飲んで堕胎しようと試みるが、失敗する。実はこの失敗は、赤ん坊を産みたいという彼女の潜在意識が招いたものであると考えられ、Rosamund の場合はピルを使用することなく、むしろ堕胎に失敗し赤ん坊をもったことによって、自立への確かな一歩を踏み出すのであるが、観念的な自立志向から実生活にしっかりと根を下ろした真の自立へと成長してゆく彼女の屈折した心理については、先述の〈潜在意識〉と共に後述することにした。

‘women’s novelist’ と定評のある Drabble はまた、フェミニストとも目されている。イギリスで女性解放運動の最初の輪が広がり始めたのは、1967年末のことだという。<sup>6)</sup> Drabble 自身は N. S. Hardin との対談で語る<sup>7)</sup> ように、自分がフェミニストであると意識したことはないようである。しかし Hardin が言う<sup>8)</sup> ように、彼女の作品では女性のステレオタイプを排除し、女性の持てる能力と自立心が強調されていること

が多い。Drabble は自分の周囲のあらゆることに強い興味と関心をもっており、そうすることによって一種の生活のリズムと深い喜びを見出すのだと言う。<sup>9)</sup> 'I actually compose very easily, I don't sweat over the sentences at all, they just pour out.'<sup>10)</sup> という言葉が示すように、彼女にとって小説を書くということは、このリズムと喜びのごく自然な発露なのだ。彼女の小説のもつ強味の一つはその〈日常性〉である、とはよく言われることである。日常生活のどこにでも見られるエピソードが随所にちりばめられ、登場人物達の会話は生き生きとしてスピーディである。

women were very good at anything they had not been made to be bad at, and women had never been shut off from the materials of fiction. A pencil and a piece of paper,... and all human life was there, as it were.... women were insatiably interested in people.<sup>11)</sup>

これは、「女性の一流作家がこんなにも多いのは何故だと思うか」という問いに対する彼女の答えだが、これが彼女の創作の基本的な姿勢なのである。

このような姿勢をもつ Drabble の、初期の作品には共通点が多く見られる。まず第一に、登場する女性達の知的レベルの同一性。ここに描かれる女性達はその殆どが、謂わゆる Oxbridge 出身者である。ただ一人の例外は第二作の主人公 Emma であるが、それでも彼女が知的優越性を備えた女性であることをうかがわせる表現が随所に見られる。第二に、これらの女性に内在する〈性意識の異常性〉。E. C. Rose は Emma にみられる〈神経性食欲欠如症〉の徴候を指摘し、それと彼女の性意識との相関性を論じている<sup>12)</sup> が、Emma が時折示す性に対する嫌悪感及び強い拒否反応は Sarah にも共通するものであり、殊に Rosamund に於ては、それは一段と深く激しいものになっている。彼女の場合はこの〈性意識の異常性〉に対する自覚が、彼女に〈未婚の母〉を決意させる要因の一つとなっているのであるが、それについては後に述べることにしたい。第三は男性登場人物

のキャラクターの同一性である。第一作で Louise の愛人 John は粗野ではあるが活気に充ちており、他人を惹きつけずにはおかない妙な魅力の持ち主として描かれているが、この彼のキャラクターはそっくりそのまま第二作の Emma の夫 David に引き継がれている。全くのところ、あまりにも両者のキャラクターが同一であるため、読後混乱を起す程である。Drabble の小説では男性は、さして重要な任務をおびた存在ではないようである。第四は、第三点とも関連があるが、これらの男性登場人物の職業が殆ど限定されていることである。第一作では John が舞台役者、Louise の夫 Stephen は小説家。第二作では David が舞台役者、Emma の浮気の相手 Wyndham は演劇ディレクター。第三作では Rosamund の一度きりの情事の相手 George が BBC のアナウンサー、彼女の友人達は小説家……といった具合である。つまり、殆どあらゆる登場人物が演劇或いはテレビ・ラジオといったメディアの世界に生きているのである。このような登場人物の職業にみられる偏頗性は、夫がロイヤル・シェイクスピア劇団の役者であり、自らも一時舞台に立っていたことがあるという、Drabble 自身の環境によるものであろう。上述の共通点のうち、もっとも印象的かつ意味深いと思われるのは、第一にあげた〈女性の知的エリート性〉である。

Drabble は Cambridge 大学 Newnham College を優等で卒業した才媛であるが、彼女の三才上の姉 Antonia Byatt もやはり同じ Newnham College を優等で卒業し現在作家兼評論家として活躍中である。A *Summer Bird-Cage* を発表したのは Cambridge 大学卒業後三年目で、Drabble 24 才の時であったが、結婚及び妊娠のために舞台女優への夢を捨てざるを得なかった彼女のこの処女作で、まず印象的なのは、語り手である Sarah が Oxford 出身の 24 才の女性で、彼女の姉 Louise もやはり同じ Oxford 出身の才色兼備の女性という設定であることだ。先述の Drabble の創作の基本的姿勢及び彼女が Hardin との対談で語った言葉——「私にとって小説を書くということは、私という人間の内にある女

性としてのさまざまな面を表現してみせるということなのです] <sup>13)</sup> ——と、この事実とを重ねてみる時、この作品は一層興味深いものとなる。少なくとも、そのことが一人称で語られたこの小説に、或る種の現実感を与えていることは否めないであろう。第三作 *The Millstone* の、**Cambridge** を卒業後講師への道を目指して更に学問を続けようとする *Rosamund*。第四作の、極めて優秀な成績でグラマー・スクールを卒業した後 *Queen's College* に籍をおく女子大生の *Clara*。その他、彼女らを取りまくさまざまな女性達——*Sarah* や *Louise* の大学時代の友人、或いは *Oxford* 出身だが *Rosamund* とは違った生き方を選んだ彼女の姉の *Beatrice* ——。いずれも作者自らを思わせるような若き知的エリート女性である。

J. ミッチェルによれば、<sup>14)</sup> 先進資本主義世界の自由民主諸国では女子学生は大学生の構成の 1/4 弱から 1/3 強を占めており、アメリカを例外として他の国々では 26% 以下、ということである。イギリスでは極めてユニークな教育制度のもと、学校の 1/3 以上が男女いずれかみの学校であり、しかも上級学校になればなるほど女性の比率は少なくなり、大学へ行く時までに女性は全学生の 1/4 にすぎなくなる。そのうえ、女性の比率は大学の名声と反比例する傾向があり、小さな公立大学では女性が約 35%、大きな公立大学では 25% だが、*Oxbridge* となるとわずか 12.5% にすぎない。*Drabble* のこれらの主人公達が、いかに選ばれた少数の知的エリートであるかが分ろうというものである。この *Drabble* の好んで知的エリート女性を題材に扱うということには、何か意味があるのであろうか。〈知的エリート性〉は、物語の展開に如何なる形で関わっているのか。

## II

ボーヴォワールは 1966 年に来日した時の講演で、就職に際して如何に女性が男性に比して不利・不当な扱いを受けているかについて、フランスの現状を例示しているが、イギリスでの

実態はどうであろうか。降旗氏によれば、<sup>15)</sup> **Cambridge** 出身者の進路選択の一般的傾向は、〔研究職や上位の学位獲得にのり出す者が多く、(初等・中等)教育の教師になる者は少ない。地方公務員より国家公務員になりたがる。産業に入るより……専門職を選ぶ。〕ということだ。しかし、こうした傾向も〔1960 年代から急速に改まりつつあり、かつては実業界に背を向けていたオクス・ブリッジの卒業生も積極的に入るようになってい] <sup>16)</sup> というのが現状のようである。しかしこれも一般的には男子を主とした現状であるらしい。ミッチェル女史はイギリスで専門的職業に就いている女性のパターンについて述べているが、<sup>17)</sup> それによれば、〔女性が圧倒的多数を占める職種に就くか(この場合は、保母や稽古事のように、職業そのものが低くみられている。地位としては奉仕に等しく、給金は「施し」程度だ)、あるいは、専門職のなかに微率を占めて「例外的女性」という皮肉な部類に入れられるかのどちらか〕であり、会社で働いている 142 人の大卒女性への調査によると、〔そのうち第一級優等卒業学位をもつ 15 人でさえ昇進について特定の野心をもつ者は 2 人にすぎず、もう 1 人の者はおそらく意味深長に、野心はとっくの昔になくしていて、いまはただ平等賃金を得たいとだけ思っている、と語った〕ということだ。

*Sarah* は *Oxford* を卒業後すぐにパリに渡って女の子達に英会話を教えている。しかし彼女がその現状に決して満足しているのではないことは次の言葉から分る。

when the letter arrived from Louise asking me to go and bridesmaid, I heaved a sigh of relief and bought my ticket. Also, I felt that it was time I stopped wasting time. (*SBC*, p. 7)  
友人達も似たりよったりだと、*Sarah* は姉に次のように語る。

They're all making as atrocious a mess of it as me. Wandering around America or the Continent wishing they had something better to do, or married and bored, or teaching in secondary moderns--God, you can take the lot

for me. (SBC, p. 183)

Sarah は姉の結婚式が済んだ後 London に出て BBC で職を得るが、それは 'better than nothing' (SBC, p. 65) という程度のものであった。

I hadn't really been doing anything in Paris. I had gone there immediately after coming down from Oxford with a lovely, shiny, useless new degree, in a *faute-de-mieux* middle-class way, to fill in time. (SBC, p. 7)

と述べているように、彼女にとっては就職は謂わば〈時間つぶし〉であって、いつまでも親元でブラブラしていても仕方がない、いずれは就職しなければならないのだから、という程のものであった。どうしても就職しなければならぬという切羽詰まったところもなければ、職種に対しての選り好みもない。以下は London に出る前の彼女と母親との会話である。

MAMA: What will you live on while you're there? ME: I'll get a job. I'll have to sometime, you know. I'll write to the appointments board. MAMA: Just any sort of job? ME: Whatever there is. MAMA: Don't you want a proper *career*, Sarah? I mean to say, with a degree like yours... ME: No, not really, I don't know what I want to do. (SBC, p. 62)

Oxford での学位取得後彼女が最初にとった行動（パリでの英会話の個人教授）も、Beards が言う<sup>18)</sup> ように、男子の場合では到底考えられないことであった。自分の進むべき道が決まらず、従って職業に対しても何ら注文をもたない Sarah と対照的に、はっきりと目的意識を持ち、職業を自分の生活の中に位置づけているのは Rosamund である。彼女の場合は、自己の知的エリート性を十二分に意識しており、その選んだ職業はあくまでも己れの恵まれた能力を前提にしたものであった。それは 'a trade that could be employed as well in a hospital bed as anywhere' (M, p. 112) であり、生涯自活が可能というものであった。このような Rosamund の職業に対する意識は、Octavia という私生児を得ることによって一層確たるものになっていくのであるが、真に自立を志す女性にとっては、

経済的自立という問題は何物にも優先して考えるべきことであろう。

Emma も職を得たいと望んでいるが、彼女は Sarah のようにどんな仕事でも構わないとは考えていない。彼女は結婚前ファッションモデルとして働いており、結婚後も妊婦服のモデルをしたりしたが、この種の職業は安定したものとは言いがたい。結婚して二人の子供を持った今、'a good, steady, lucrative job' (GY, p. 10) として彼女は、テレビ局のアナウンサーの職を得ようとしている。しかしこれは果たして、結婚した、幼児を二人持つ女性にとって「安定した」職業と言えるであろうか。とても Rosamund のように「ベッドの上でも出来る仕事」という訳にはいかない。Emma と Rosamund の職業意識の違いは、Emma のアナウンサーという職に対する次のような考えによって明白である。

I was admirably suited for such a post. I have a face of quite startling and effective,... I have always had a passion for facts and a mild yearning for notoriety, and I could imagine no more happy way of combining these two interests. (GY, p. 10)

Emma にとって職をもつということは、経済的自立を図るためではなく、自分の欲望を満たすためであった。彼女は結婚や子供によって自分の失ったものを、少しでも取り戻すために働こうとするのである。

このような三者の職業観の違いは、即ち、彼女達の〈自立意識〉の違いを示すものである。独身で、いざとなったらいつでも親の所へ帰ればよいと思っている Sarah (SBC, pp. 63-64)。同様に、David の妻として、自活する必然性のない Emma。Sarah の 'don' に対する見解、<sup>19)</sup> 又、夫について Hereford に行くために就職を見送る Emma の選択に象徴されるように、前二者はいずれも、旧来の社会的・伝統的な女性の役割から脱し切れない意識をもった女性である。これに対し、Rosamund は〈未婚の母〉という選択が示すように、男性優位に基づいた既成の価値観にとらわれない生き方を試みるのである。Rose は初期三作品の相関性について、

'A Summer Bird-Cage states a problem and *The Garrick Year* and *The Millstone* offer alternative solutions to it.'<sup>20)</sup> と述べているが、それと共にこの三作品は、現代社会に於ける女性の自意識の変化を発展的に扱っている、という点で相互に関連性があり、それを表象するのが上述の職業観である。殊に Rosamund のそれは、Beards が指摘するように、'a growth in the author's feminist consciousness'<sup>21)</sup> を示すものであると考えられる。

いまひとつ三作品の相関性を印象づけるものは、主人公の設定である。独身・未婚・Oxford 卒という Sarah から、夫有・子供有の Emma へと、語り手の境遇を一変させた Drabble は、第三作で Rosamund をその両者とひとつずつ共通点をもつ女性として設定した。つまり、Rosamund は前二者を踏み台にして成立した女性像と言えるのであるが、その二大要素となっている〈知的エリート性〉と〈子供〉とが、どのように結びついて Sarah から Rosamund へ発展していくのかを、次にみることにしたい。

### III

Rosamund の場合は先に述べたように、その〈知的エリート性〉は彼女の選んだ生き方に絶対不可欠なものであった。しかし Sarah には、Oxbridge 出身だからといって、そのことを何かと結びつけて考えるという姿勢はない。'what a girl can do with herself if over-educated and lacking a sense of vocation' (SBC, p. 8) という彼女の言葉が示すように、学歴とは彼女にとっては少なくとも、実的な面で役に立つべきものという存在ではないのである。Oxford は彼女にとっては、そのような実利性をもったものでなく、'so entirely undergraduate and nostalgic and enclosed that a visitor feels compelled to establish some contact with the university world' (SBC, p. 58) である。謂わば心の拠り所とでも言える。姉の結婚に不審感を抱いていた Sarah は、ルームメイト Gill の離婚により、結婚への不安と疎ましさをますますつのらせる。

前者は、まったく思いがけない信じられない結びつきであり、後者は愛情と信頼を基盤とした、誰が見ても確かな結びつきであった。'I began to wonder if I myself would ever dare to get married.' (SBC, p. 187) 結婚に寄せる期待と不安、愛に対する信頼と絶望……。

こういった両極の間で揺れ動く Sarah であるが、彼女には性急に結論を出そうという気は全くない。最高学府は出たけれど、そして人生に夢はいっぱい持っているけれど、さしあたり自分が何をしたらよいのか分らない。分っているのは 'I never will settle down,.... There simply isn't a niche for me.' (SBC, p. 183) ということだけである。彼女にとって 'niche' とは一体何をさすのであろうか。'a lovely, shiny, useless new degree' (SBC, p. 7) を手にバリーで、二ヶ月間を無意味に、ただ「時間つぶし」に過ごした Sarah。'To fill in time till what? What indeed?' (SBC, p. 7) この 'what'こそ彼女の求めているものののだが……。

バリーでの二ヶ月間は 'serious' ではなかったと彼女は述懐する。豊田昌倫氏も指摘しておられる<sup>22)</sup>ように、語・句或いは節・形態素等といった、さまざまなレベルに於ける反復語法の使用は、Drabble の文体の一つの特徴であるが、この一例が、姉の結婚式に立ち合うべく家に呼び戻された Sarah がバリーを発って故郷に向かう、冒頭の二ページに頻繁にくり返される 'serious' である。

It was quite pleasant, teaching those birdy girls, but it wasn't serious enough for me. It didn't get me anywhere. So when Louise wrote, the thought of England rose before me, gloomy, cold, but definitely serious. And as I wanted to be serious, I bought... and turned my thoughts to the Appointments Board, and National Insurance, and other such eminently serious subjects.... I thought about jobs, and seriousness, and... (SBC, pp. 7-8)

この語は後にはもっと積極的な役割を担わされる。Louise とその愛人 John について、Sarah が John の友人と交わす会話と、それに続く Sarah

の独白に於ける 'serious' がそれである。

'Perhaps Louise is in love with him. Is he a serious kind of person?' 'Oh very, I suppose.' 'Because she couldn't be in love with anyone less serious than her.' And as I said that, I realized what it was that Louise and I really had in common. We were both serious people. (SBC, p. 151)

Sarah はこの時、自分と Louise が 'serious' な人間だという点で一致していることに気付く。このことは、Louise が選んだ生き方を、Sarah も同じように採択したかもしれない可能性を示すものではないだろうか。つまり Sarah にとって、自分と同じ本質を備えた Louise は、その故に、常に最も信頼できるガイド的存在であるとも言える。

Louise にとって、Oxford は 'paradise' (SBC, p. 8) であった。彼女が Sarah に語るように、そこは[人が他人に対して素直に優しくなれる、'human relationship' を信ずることのできる所] (SBC, p. 201) であった。婚結に失敗し、自分の選んだ生き方に自信をもてなくなった Louise にとって、Oxford に対する懐旧の念は、或る意味では Sarah よりもはるかに熱く苦いものであったろう。Louise にとって Stephen との結婚は、大学卒業以来一度も充実した満足感を伴うことのなかった生活から脱け出す、おそらく唯一確実な手段にすぎなかった。信頼とか愛は問題ではなかった (SBC, p. 201)。

Oxford で正直に、他人に優しく、他人の感情を踏みつけにしないようにして生きること、を学んだはずの Louise をこのように変えたのは、彼女より一足先に結婚した親友 Stella の結婚生活の実態であった。幼い子供の世話に追われ、そのうえ二人目を妊っている彼女の愚痴を聞くまでもなく、その実態は Louise にとっては、物質的にも精神的にもこのうえなくみじめなものと映った。大層ショックを受けた Louise は決意する。'never never never will I let that happen to me. Never will I marry without money.... I will never have children. I want my life, I want it now, I don't want to give it to the

next generation.' (SBC, p. 205) これが彼女の得た結論であった。Oxford が彼女の中に育んでくれたもの——'human relationship' を信ずることのもたらす安らぎ——を、彼女はその時みずから進んで放棄したのである。[悪と呼ばれるものは善が墮落したものである。この墮落は、意識ある被造物が神よりも自己自身に興味をもち、「自分の力で」存在したいと思う時生ずる。これが傲慢の罪である。]<sup>23)</sup> と、C. S. ルイスは述べているが、Louise の出した結論は彼女の墮落を示すものではないだろうか。彼女は[誰もが瞠目せずにはいない、際立った美貌] (SBC, p. 9) を武器に、金目当てで Stephen と結婚したのであったから。John の求婚を斥けて Stephen と結婚しておきながら、John と情事を持ち続ける Louise。'I really don't love John enough to marry him.... I know that he'd be unfaithful if we did marry and I don't love him little enough to enjoy that,' (SBC, p. 202) 'to have my cake and eat it' (SBC, p. 203) という Louise の生き方は彼女の傲慢と、エゴイズムを表すものである。Drabble は 'God' の存在 (〈天意〉とでも言ったらよいであろうか) を信じていると述べているが、<sup>24)</sup> 神の意志に逆らって傲慢の罪に堕ちた Louise には、行く手に何が待っているのだろうか。

Stephen と結婚した後の或る日、彼女は Stella から一通の手紙を受け取り、それによって自分が彼女の生活ぶりを見て感じたことと、彼女が現にその生活の中にいながら感じていることとの相違を知る。その手紙には、二人目の子を出産した現在ではずっと気分が落ち着いていること、子供は可愛くて仕方がないこと、などが記されていた (SBC, p. 206)。Stella の家の中の、特に赤ん坊によって引き起されたさまざまな混沌は、実に細かく Louise の眼にとらえられている。部屋のあちこちに吊るしてあるおむつや肌着、それらの発散する湿気、赤ん坊のムツとする乳臭さ、部屋中に散乱している頑具、そして疲労しきった Stella。Louise の 'I'll never have children' という叫びは、彼女の個人としての根源を脅かすものに対しての、本能的な自

己防御から出たものであった。しかし果たして本当に子供は自分を脅かす存在なのだろうか。John との情事が露顕し、Stephen に叩き出された今、‘Which was true, in any case, the letter or what I saw?’ (SBC, p. 206) という Louise の問いには、彼女の苦悩がこめられている。己れの選んだ生き方に疑問を抱き始めた Louise にとって、いま必要なことは、‘Oxford’ の原点にかえることではないだろうか。物語の終末部分で、Sarah にこれまでの一切を語って聞かせる彼女の脳裡に、しきりと Oxford が去来するという一事は、これを示すものであると考えられる。

#### IV

〔私は自分の人生を生きたいのだ、今というこの時に。それを子供のためにとられるなんて真っ平だ〕 (SBC, p. 205) と Louise に言わせたのも、その決心に疑惑を生じさせたのも、つまりは〈子供〉であった。〈子供〉は女にとって如何なる意味をもつ存在なのか。第一作で物語の終末部分に於て Louise により提起されたこの問題が、第二作 *The Garrick Year* での主題となる。〈子供〉は既に物語の冒頭から、象徴的に登場するのである。息子の Joseph に授乳している Emma に夫の David が話しかける場面がそれである。彼女は語りかける夫から顔を背け、思わずカッとなる心を押え、必死で冷静さを保とうとする (GY, pp. 8-9)。‘I must keep calm’ (GY, p. 8) と絶えず自分に言い聞かせるのであるが、それはすべて ‘for his (Joseph) sake’ (GY, p. 9) であった。夫から顔を背けた彼女が見入るのも赤ん坊の Joseph である (GY, p. 8)。つまりここでは、〈子供〉は Emma の突き上げてくる諸々の衝動——怒り・絶望・不信——を宥め、結婚生活の破局を食い止める働きをもつ存在として設定されているのである。

Emma の結婚観は次のようなものであった。

All I wanted was this feeling of terror with which he inspired me: with him, I felt that I was on the verge of some unknown and fright-

ful land, black desert, white sand, huge rocky landscapes, great jungles of ferns. (GY, p. 24) しかし彼女のこのような期待がいつまでも続くものではないことは言うまでもない。人は結婚に緊張とか刺激を求めるべきではないのだ。‘I did not want an easy life, I wanted something precipitous’ (GY, p. 25) と考える彼女は、後に情事の相手となる Wyndham に一目見て危険な女だと思わせる (GY, p. 93) 程に、飢えた充たされない思いで、David との生活を送っていた。‘It (marriage) had already deprived me of so many things... my independence, my income, my twenty-two inch waist, my sleep, most of my friends...’ (GY, p. 10) この ‘my’ の執拗な反復は、現在の没私的な状況に対する彼女の強い不満を表すものである。

Emma は長女 Flora を妊ったと知った時、David を心から憎み、自分の惨めさを呪った。しかし Flora を出産後、彼女は徐々に変わってゆく。この内に生じた変化は自分でも予期せぬものであった。

I was devoted to Flora,... every time I saw her I was filled with delighted and amazed relief. What I had dreaded as the blight of my life turned out to be one of its greatest joys. (GY, p. 27)

赤ん坊がどれ程〈光り輝く存在〉であり、接する者に〈無上の幸福感と安らぎをもたらす存在〉であるかを、Emma は Flora を通して知る。

三才の男児が奇蹟的に助かったという飛行機事故の報道に対する彼女の反応は、この彼女の内にある〈母性〉を象徴するものとして特に印象深い。彼女はその記事を読んで感動し涙するが、David の反応はむしろ冷ややかな程素っ気ないものであった。‘Bloody stupid yourself. Selfish great oaf,’ (GY, p. 97) と David を責める Emma であるが、彼女の涙は実はもっと複雑なものではなかったか。彼女が泣いたのは、その時彼女が浮気中であつたということが大きく影響しているのではないだろうか。つまり母親であることを瞬時にせよやめて、一人の女として生きていた、そのことが無意識のうちに、心の

とがめとなっていて、この三才の幼児の救出されたことに対する感動となったのではないか。助けを求めて一人大海を漂う幼児の姿は、母親に置き去りにされた我が子の姿とオーヴァラップしたのである。救出された幼児はイギリスで彼を待つ母親と会えるであろうという記事に彼女は涙を押えることができない。(GY, p. 96)。Emma は妻をやめること（即ち、Wyndham と浮気すること）に対しては平気でいられても、母親をやめることには抵抗を覚えずにはられない女性なのであろう。

危険と緊張とを望みながらも得られない苛立ちと、内に潜む確かな〈母性〉との間を揺れている Emma の心は、Flora が川に落ちて溺れかけるという出来事を契機に大きく変わる。Sarah と Louise が無心に眠る赤ん坊の姿から得た深い感動は、<sup>25)</sup> 第二作では更に程度を強め、Emma に行動の二者択一を迫る。彼女は緊張と危険に充ちた生活を望むことはやめようと決意する。Emma は彼女を必要とし、彼女に頼り切ってくる子供の傍に、己れの居るべき場所を見出したのである。

## V

先に述べたように、前二作のヒロイン像の結晶ともいうべき女性が Rosamund であるが、彼女にあっては、その〈知的エリート性〉と〈子供〉とは極めて密接に結びついている。彼女は〈性〉に対して異常な恐怖と不安を抱いている女性である。この異常性は第二作の Emma に於てもみられたものであるが、Rosamund の場合は自分の異常さを強く自覚しており、それに深い罪悪感を抱いているという点で、Emma とは異なった展開をみせる。彼女の罪悪感というのは次のようなものであった。‘I knew how wrong and how misguided it was. I walked around with a scarlet letter embroidered upon my bosom, visible enough in the end, but the A stood for Abstinence, not for Adultery.’ (M, p. 18)

この罪の意識について彼女はまた、次のように考えている。‘Had I rushed in regardless, at

eighteen, full of generous passion, as other girls do, I would have got away with it too.’ (M, p. 18) 彼女の悲劇は正に、彼女が他の女の子達と同じようではなかった所にあったのだ。彼女は〔社会主義的な原則と中産階級的な良心が異様にまじり合った〕(M, p. 27) 家庭で、〔絶対に他人に頼らないこと〕(M, p. 9) を肝に銘じて育てられた。第四作 *Jerusalem the Golden* の主人公 Clara が永い間母親の抑圧から脱け出せなかったように、Rosamund にとって母親は超えることの出来ない、常に自分の背後から厳しい目を向けている存在であった。‘I have to live up to her (her mother)’ (M, p. 29) と、彼女が George に言うように、彼女の意識の中には、この母の教え——男と対等に生きていかなくてもはいけない、どんなことに於ても——が常に潜在しており、それが彼女の内に他の女の子達との異質性を生み出すことになった。

彼女が他の女の子達と違う点はもう一つある。それは ‘my isolation (through superiority of intellect)’ (M, p. 18) と彼女が言うように、彼女の〈知的エリート性〉である。姉の Beatrice の反対にもかかわらず〈未婚の母〉になることを、彼女が断固遂行したのも実はこの己れの〈知的エリート性〉に絶大な自信があったからである。Rosamund は Sarah が、ああいう女にはなりたくないと言った、正にその ‘don’ を目指している女性であり、Beatrice のように〔せっかく Oxford で取った学位を十分に活用していない、という思いに苛まれる〕(M, p. 76) ことはない。墮胎すべきかどうか思案しながらも、手は研究中の文献の頁を繰り返して、‘a very handy image, thesis-wise, caught my attention, and I noted it down’ (M, p. 8) ということが出来る女性であり、この見事な自律性は、妊娠したらしいというショックの最中ですら、次の如く遺憾なく発揮されるのである。‘my mind,... began to revert almost of its own accord to its more accustomed preoccupations, and by the end of the morning I had covered exactly as much ground as I had planned.’ (M, p. 34)

私生児をもつということが、自分の現在の生



活及び将来の計画にどのような影響をもたらすか、彼女は冷静に見定めようとする (M, p. 49)。こうした時、何よりも彼女の支えとなっているのは、自分の優れた 'talents' (M, p. 49) であった。

友人の Joe は彼女に 'A very unwomanly woman, that's what you are.' (M, p. 40) と言うが、〈女らしさ〉とは、バードウィックが言う<sup>26)</sup>ように、[ほとんど相互作用的な状況や他の人との関係の中でみられるもの] であり、[その夫やボーイフレンドや子供と相互に影響し合う時] もっとも顕著にみられるものであるとすれば、Rosamund が女らしくないのは、彼女が他者との関わりをもつことをしなかった (M, p. 68) 結果である。'One never can tell with you. You lead such a secret life.' (M, p. 10) と友人達が言うように、彼女は自分という人間の実態を人に知られることを怖れている。他人には絶対に惨めなところを見せてはならないと常に身構え (M, p. 55)、'I was incapable, even when happy, of exposing myself thus far.' (M, p. 29) とする彼女。知的に優れていたために生じた孤立感と、自立心を持ち、どんな相手にも負けない自信を持つようにという母親の躰、との相乗作用は、彼女を周囲に垣を巡らした自意識の強い女性に仕立てあげたのである。

自分の異常な性意識に罪悪感をもつ彼女の生き方は、'unnatural' (M, p. 29) なものであり、彼女はこのような己れの虚偽性にも罪の意識を持たずにはいられない。罰とか報いとか裁きといった語が頻りに用いられるのは、その深さの表れである。たった一度きりの George との夜で妊娠したことは、'a judgement upon me... for all those other evenings of abstinence with Hamish and his successors' (M, p. 17) であり、墮胎のためにジンを飲むことはそれ自体が、'some kind of penance for the immorality of my behaviour' (M, p. 15) であると、彼女は常に己れを責め苛む。

このように我が身を罪悪視し続ける彼女を、虚偽の世界から救出するのが生まれてきた娘、Octavia である。Rosamund は彼女により、自分

がそれまで敢えて目を背してきた、知る必要がないと思っていた (M, p. 39) さまざまなことを知る。

初めて我が子を抱いた時に彼女が味わったのは、熱い心の底から感じる真の感動で、それを彼女は次のように表現する。'Love, I suppose one might call it, and the first of my life.' (M, p. 102) そして幼ない子を持つ母親の喜びに彼女は我を忘れる。Octavia に関する Rosamund の語りには、確かな愛情があふれており、それは読む者を圧倒する。出産後、赤ん坊に思いがけぬ母性を引き起され、やがてその赤ん坊がかけがえのない存在になっていくというパターンは、第二作の Emma によっても語られていることなのであるが、Rosamund のそれは、更に激しく強いものであり、読者を引きずり込む迫力に充ちている。

Rosamund が自意識の鎧をすっかり脱ぎ去り、思うさま自分をさらけ出すことのできる初めての他者——それが Octavia であった。他人との関わりを殆ど徹底的に避け通してきた彼女は、Octavia という存在を手がかりに、徐々に自分の固く閉じ込もっていた殻から外へ出るようになる。五ヶ月前だったら振り向きもせず通り過ぎた (M, p. 71) こと共が意識の端に止まるようになり、彼女は自分が変わりつつあることを悟る。'from now on I, like that woman, was going to have to ask for help, and from stranger too: I who could not even ask for love or friendship.' (M, p. 72)

## 結び

以上みてきたように、Drabble の初期の三作品は相互に関連性の強いものであるが、その集大成ともいえるべき *The Millstone* に於ては、〈知的エリート性〉は絶対不可欠な構成要素となっている。'Rosamund's possession of "an extraordinary confidence" in herself makes her a special person.'<sup>27)</sup> と Hardin が言うように、自分の能力に対する絶大な自信こそが Rosamund のあらゆる行動の源となっているのである。

Rose はこれを 'self-satisfaction that verges on smugness'<sup>28)</sup> と見なし、特に終末部分の George に対する Rosamund の対応を引用し、彼女の意識には何ら進展がなく、その心は周囲に対して依然として閉ざされたままであるとの見解を示す。<sup>29)</sup> 確かにこの、George との深い関わり合いを避けようとする、Rosamund のあくまでも利己的な本能的とも言える姿は、印象的である。しかし 'If I asked more favours of people, I would find people more kind.' (M, p. 161) ということを身を以って知った彼女は、もはや二度と自分だけの殻に閉じこもることはないであろう。むしろ、この終末部分で Rosamund と George の間に交わされる次のような会話の中に、新しい男女の姿を示そうとする作者の意図を読み取ることは危険であろうか。

'You never seemed to want a husband.' 'No,' I said, 'perhaps I never did. Though I sometimes think it might be easier, to have one. It would be nice to have someone to fill in my income tax forms, for instance,'... 'You can't have everything,' said George. 'No, indeed,' I said. 'And I have more than most people, I admit.' 'So do I,' said George, 'so do I. Though I, too, have my moments of weakness. Sometimes I feel it would be nice to have someone to iron my shirts. But then, you see, of course I know that I can always do it myself. ... So it's no argument, really, is it?' (M, p.171)

'Emancipated woman, this was me:' (M, p. 9) という Rosamund であるが、彼女が解放されたのは、伝統的な 'the second sex' としての女性観からであり、'a life without marriage or male dominance'<sup>30)</sup> こそが、彼女の目指すものである。

付記：テキストは Penguin Books の *A Summer Bird-Cage* (1982), *The Garrick Year* (1981), *The Millstone* (1981) を用いた。

#### 注

1) Michael Ratcliffe, *The Novel Today* (Longmans, 1968), p. 16.

- 2) 小西昭之著『大英帝国は二度死ぬか』 p. 40. (毎日新聞社)
- 3) 同上 p. 67.
- 4) 福島正夫編『家族 4 欧米資本主義国』 pp. 81-2. (東京大学出版会)
- 5) Virginia K. Beards, "Margaret Drabble: Novels of a Cautious Feminist", *Critique*, Vol. 15, No. 1 (1973), p. 36.
- 6) J. ミッチェル著 佐野健治訳『女性論』 p. 45. (合同出版)
- 7) Nancy S. Hardin, "An Interview with Margaret Drabble", *Contemporary Literature*, Vol. 14, No. 3 (Summer 1973), p. 274.
- 8) Loc. cit.
- 9) *ibid.*, p. 275.
- 10) *ibid.*, p. 275.
- 11) Interview with Terry Coleman, "A Biographer Waylaid by Novels", *Guardian*, 106 (April 15, 1972), p. 23.
- 12) Ellen C. Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures*, (Macmillan, 1980), pp. 9-11.
- 13) Hardin, *op. cit.*, p. 294.
- 14) ミッチェル, *op. cit.*, pp. 41-2, 158-60.
- 15) 降旗節雄著『イギリス—神話と現実』 p. 139. (五月社)
- 16) 間宏著『イギリスの社会と労使関係』 pp. 37-9. (日本労働協会)
- 17) ミッチェル, *op. cit.*, pp. 156-7.
- 18) Beards, *op. cit.*, p. 36.
- 19) *A Summer Bird-Cage*, *op. cit.*, pp. 183-4.
- 20) Rose, *op. cit.*, p. 23.
- 21) Beards, *op. cit.*, p. 40.
- 22) 豊田昌倫「Margaret Drabble の文体」『英語青年』 1978 年 10 月
- 23) C. S. ルイス著 大日向幻訳『「失楽園」序説』 p. 127. (叢文社)
- 24) Hardin, *op. cit.*, p. 289.
- 25) *A Summer Bird-Cage*, *op. cit.*, pp. 178-9.
- 26) J. M. バードウィック著 今井欣悦他訳『女性心理』 p. 206. (原書房)
- 27) Nancy S. Hardin, "Drabble's *The Millstone*: A Fable for Our Times", *Critique*, Vol. 15, No. 1 (1973), p. 23.
- 28) Rose, *op. cit.*, p. 17.
- 29) *ibid.*, pp. 17-24.
- 30) Beards, *op. cit.*, p. 40.